

氏 名	遠 志保 (つじ しほ)		
学 位 の 種 類	博士 (国際文化)		
学 位 記 番 号	甲第 1 号		
学位授与年月日	平成 1 8 年 3 月 2 1 日		
学 位 論 文 題 目	渡来人伝説の研究		
審 査 委 員	主査	愛知県立大学教授	遠山 一郎
		愛知県立大学教授	大塚 英二
		国立歴史民族博物館助教授	小池 淳一

1. 学位論文の内容の要旨
2. 学位論文の審査の要旨
3. 最終試験の結果の要旨および担当者

## 1. 学位論文の内容の要旨

この研究の目的は、これまでの伝説研究の中で取り上げられてこなかった渡来人伝説を研究することによって、新たな伝説研究の可能性を見出すことにある。その方法として、徐福渡来伝説・百済王渡来伝説・崑崙人渡来伝説などの伝承地における現地調査を達はおこない、これらの伝説を地域の人々の視点から見直そうとする。地域の人々の日々の暮らしのなかで、それらの伝説がどのように生かされてきたか、あるいは生かされようとしているかという地域の人々と伝説との関係を、多様な伝承主体という観点からこの研究は追究する。くわえて、渡来人伝説の周辺には、伝説ばかりではなく文字資料も見いだされる。ことに徐福のばあいには、かなりの量の伝えが文字に記されている。この資料の内部において、書いてと受けてとによって、徐福の伝えに変容が加えられた跡を達は見出す。この資料のなかの変容を達はたどり、口伝えによる変容のみではなく、文字を通した変容を跡づけ、口承と書承との並行する関わりをこの研究は示そうとする

さらに、古代史研究に委ねられていた東アジアにおける交流の実態を、伝承のなかで読み解いていくことをもこの研究は目指す。

## 2. 学位論文の審査の要旨

遠志保の博士号申請論文の審査には本大学院国際文化研究科博士後期課程担当教授遠山一郎(主査)、大塚英二(副査)に加え、愛知県立大学学位規程第8条第3項により、国立歴史民俗博物館小池淳一助教授が副査として審査に当たった。

その3人による論文読み合わせののち、2005年12月22日に同じく3人が遠志保に対する口述審査を行った。

なお、申請者は単位取得退学後3年以内での課程博士申請者であるため、外国語試験を免除した。

### 3. 最終試験の結果の要旨および担当者

報告番号	第 1 号	氏 名	達 志保
試験担当者	主査	愛知県立大学教授	遠山 一郎
		愛知県立大学教授	大塚 英二
		国立歴史民俗博物館助教授	小池 淳一

(試験結果の要旨)

渡来人を主人公とする伝説は、民俗学においてこれまでほとんど研究の蓄積がなかった。これを対象に取りあげ、その研究の可能性を探ったきわめて意欲的なものということができよう。この論文は、渡来人を主人公とする日本のいくつかの地域社会における伝説を「現在」というキーワードでとらえ、その実態を細かに叙述する。とともに、伝説をめぐるさまざまな人々の動きを、聞き書きのみに限らず多様な媒体とともにとらえ、そうした状況が示唆するものをこの論文は検討する。その結果として、この論文は柳田国男とその継承者たちの論とは異なり、地域社会の動向が伝説を新たな段階に押しあげ、成長、変転させてゆく過程を具体的に指摘することに成功している。この論文は日本民俗学における伝説研究に新たな知見を加えただけではなく、現代社会における民俗研究の有効性についても重大な貢献をしたものといえよう。とりわけ、伝説の主人公の固有名詞に託された地域社会の歴史観とその再創造を採ることによって、国家から見るのとは異なる対外認識を抽出している点は、今後のさらなる展開を期待することができ、優れた達成といえることができる。この研究は、地域における伝承の実態を精確にとらえ、受け止めた上で、文献記録の検討や相互比較を慎重に行いながら検討を進めるという民俗学の基本的な姿勢を十分にふまえており、高い説得力を持っている。

ただ、つぎのような課題が残されている。

(1) この論文を柳田国男の伝説研究にややもすると捉われすぎている。

柳田が民俗学を打ちたてようとしていたころより、今は民俗学の研究としての性格がはるかに確かになっている。達がみずからの伝説研究を積極的に進めるためには、達自身の言葉によって伝説などの内容を定めてゆくことが望まれる。

(2) 伝説を地域の人々の現在という視点から見直すという点は重要であるが、そのばあい、伝説認識のあり方を現在、近代、近世以前などに分けて考え、時代ごとの認識の質の違いを考慮に入れる必要があるのではないか。

(3) 伝説が特定の人々の意図によって作られているばあい、そうした伝説を虚構と認識できない人々にとっては、それが史実であるかのように受け止められ、誤った歴史認識が形成される恐れがある。このような伝説の作られるところに立ち会っている研究者としての立ち場を考えておく必要があるだろう。

(4) 書かれた資料と口伝えの資料との間には性格の違いがある。この性格の違いをこの論文はどのように橋渡ししようとするのか、よりこまかな跡づけが望まれる。

達 は徐福伝説に関する取り組みではよく知られた研究者であるが、大学院博士後期課程に進学後、徐福にとどまらず渡来人伝説というより広い主題を設定し、従来の研究成果を土台としながらも、さらなる調査研究を進めてきた。達はその成果を日本民俗学会、日本口承文芸学会、日本昔話学会等で発表してきている。達の研究者としての姿勢は意欲的であり、学会内での評価も高いことを言い添える。